

主 題：新しい人生を受ける 4

聖書箇所：コリント人への手紙第二 5章11節

私たちクリスチャンは「新しく生まれ変わった者たち」であると学んで来ました。主イエス・キリストによって救われた私たち信仰者は、新しく生まれ変わった者たちです。それゆえに、私たちは新しい人生の目標や目的をもって歩み始めました。新しい価値観をもっています。また、私たちは新しい人格、新しい心をいただいた者として、新しい歩みを始めたのです。そのように新しく生まれ変わった私たち信仰者は次のように生きる者たちであると見ています。三つのことを学び始めました。

☆新しく生まれ変わった者は？

A. 神を愛する者 : 行ないをもって愛する

主が示してくださった愛をもって、私たちは神を愛する者へと生まれ変わったのです。ですから、

- 1) 喜んで主のために犠牲を払う
- 2) 喜んで主のみことばに従い続ける

これをもって、私たちは神を愛していることを証するのです。

B. 神を信じ、信頼する者

主イエス・キリストの恵みによって救われた私たちは、どんなときでも、

- 1) 神のみ約束への信頼と確信がある
- 2) 神のみことばへの信頼と確信がある

このような者へと生まれ変わったのです。神のみことばが与えられていることは感謝です。みことばは私たちに神のみこころが何かを教えてください。神は何を望んでおられるのか？どのように歩いていったらいいのか？これからどうなっていくのか？これらの大切な真理を教えてください。私たち、主によって贖われたひとり一人に神はどのようなことを約束してくださったのか？それを知りたければこのみことばをしっかりと知ることです。そして、その約束に立つことです。どんなことでもできる全能の神が私たちの神であり、その方が与えてくださった約束に立つて生きることができる、そのような歩みをする者へと私たちは生まれ変わっているのです。

前回までにこのAとBを見ました。今日見る三つ目は、

C. 神を恐れる者

テキストはⅡコリント5：11です。パウロはこう言います。「こういうわけで、私たちは、主を恐れることを知っているので、人々を説得しようとするのです。私たちのことは、神の御前に明らかです。しかし、あなたがたの良心にも明らかになることが、私の望みです。」、初めの部分に「私たちは、主を恐れることを知っている…」と記されています。言い方を変えるなら、「私たちは主を恐れる者たちである」と言うのです。ということは、イエス・キリストの恵みによって救われた私たち信仰者は、神を恐れる者へと変えられた者たちであると言えます。

かつての私たちは神を恐れていませんでした。パウロはローマ3：18でこのように言っています。「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」と。主イエス・キリストを信じることもなく、創造主なる神に逆らい続けて来た私たちを含めて、人間はすべて、生まれながらに神の前に恐れをもっていないと聖書は言います。この方を心から崇拝することも、この方に対する崇敬の念も感謝の念も、私たちは全く持っていなかったのです。被造物から崇められて当然の神が、その被造物によって崇拝されることがなかった。私たちはその神に感謝して来ませんでした。その方を心から崇めては来ませんでした。パウロは同じローマ1：21で「それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。」と言っています。まさに、これが私たちでした。神に感謝すべき人間が、神を崇めて当然の私たちが、そのようにして来なかったのです。

しかし、パウロは言います。確かに、かつての私たちはそうだったけれど、今、私たちは神を恐れることを知っている。この「知っている」ということばは、ただ知識をもっているということではなく、ある特別な行動をどのように行なうのか、また、ある目標を達成するためにどうすればいいのかという、そのための知識のことです。ですからパウロは、神を恐れる者としてどのように生きていけばいいのか？どのように歩いていけばいいのか？そのことを私たちは「知っている」と言うのです。ですから、パウロたちは神を恐れる者にふさわしい歩みを実践していたのです。

今、私たちが考えなければいけないことは、私はそのような歩みをしているかどうかということ。私たちが新しく生まれ変わるということ、救われるということは、神を恐れる者として生まれ変わる

ということです。でも、神を恐れるというのは、ただことばでそのように言うだけではありません。それにふさわしい生き方があるのです。パウロはどのように歩んでいくことが神を恐れる者としてふさわしいのか？それを「知っている」と言ったのです。それはパウロだけではありません。同じように、信仰者たちはそのことを知ってそのように生きていたのです。繰り返しますが、あなたはそのことを知っているかどうか？です。神を恐れる者として歩んでいるかどうか？です。

今日、私たちはこの「主を恐れる」ということについて、ごいっしょに学んでいきます。どのように生きていくことなのか？願わくは、この学びを通して、そのような歩みを皆さんが継続するか、始めるか、いずれにしても、主を恐れる者としての歩みを今日から行なっていただきたいです。

◎主への恐れが生み出す二つの生き方

「おそれる」という二つの漢字を見ます。「恐れる」と「畏れる」です。

1. 「恐れる」とは？

新改訳聖書ではⅡコリント5：11は「主を恐れることを知っている」とあります。旧約時代でも新約時代でも、この「恐れる」というのは「罪の汚れを憎んでそれから離れて、神の前を聖く正しく生きていきたいとすること」と言えます。このような歩みが含まれるのです。一つの例を見ましょう。

*イザヤ

イザヤが主の前に立ったときのことで、イザヤ書6章に書かれています。イザヤは主を拝してこのように言っています。6：5「そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の【主】である王を、この目で見たのだから。」と。大変衝撃的な出来事でした。全知全能の主をイザヤは見たと言うのです。その主の臨在の前に彼は立つのです。特に、見ていただきたいのは「ああ。私は、もうだめだ。」ということばです。これは絶望の叫びです。なぜ、イザヤはこんなことばを口にしたのでしょうか？その状況をしっかり描いてください。預言者イザヤ、神に仕えて来たイザヤは神の前に立ったのです。そして、彼がそのときに口にしたのは「ああ。私は、もうだめだ。」という絶望の叫びだったのです。彼の心の中にはいったい何が起こっていたのでしょうか？

・彼の中に神が働いて彼自身の罪深さに気付かされた。

イザヤは神の前に立ったときに、自分の汚れ、自分の罪深さを改めて知らされるのです。それがこの絶望の叫びをもたらしたのです。聖い正しい神の前にこんなにも罪深い私が立っていると…。

・このときイザヤの心の中にはさばかれることへの恐れが生じた。

「ああ。私は、もうだめだ。」と言いますが、これは「悲しいかな、」という意味をもったことばが英語の聖書では使われています。自分は滅ばされてしまうという思いが彼の心を支配したからです。

だから、このイザヤを通して私たちが教えられることは、神の前に立ったときに神に仕え神の前に正しかったイザヤでさえ、口にしたことは「私は滅んでしまう」「私は罪に汚れた者だ」ということです。詩篇119：120に「私の肉は、あなたへの恐れで、震えています。私はあなたのさばきを恐れています。」とあります。ですから、神を知った人、神がどういう方であるかということを知った人の心の中に生じる思いは共通しています。神への恐れを抱きます。自分の罪深さが示されることによって、彼らはみな、この聖い神の前に私は立つことなどできない、私はさばかれてしまうという恐れが起こります。

*モーセ

モーセもそのことを経験しています。ヘブル12：21に「また、その光景があまり恐ろしかったので、モーセは、「私は恐れて、震える」と言いました。」と書かれています。シナイ山での出来事です。神の臨在を覚えたときに、その前に立ったときに、モーセ自身も言うのです。「私は恐れて、震える」と。旧約の人々を見たときに、こうして彼らは神の前に立ったときに、確かに、言いようのない非常な恐れを抱きました。それは聖い神を前にして自分がいかに罪深い者かということを知ることによって鮮明に知らされたからです。私はこの聖い神の前に立つことなどできない者だ、私のような者を神はさばかれる、それにふさわしい者であると、そのことを示されるのです。これは旧約の人々だけではありません。

*ペテロたち

新約の時代にもこのことは起こっています。思い出してください。神がペテロを召されたときです。ルカの福音書5：8に書かれています。ペテロたち漁師は漁に出ました。でも、何も獲れませんでした。そこでイエスがこうなさいと命じられた通りに網を下してみると、大量の魚が網に掛かりました。そのときにペテロは不思議なことを口にします。「これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」と言った。」と。何も獲れなかった漁師たちがイエスに従ったときに、大漁を経験するのです。この出来事とペテロの告白とが結び付かないように思いませんか？「イエスさま、どこに魚がいるかどうしてご存じだったのですか？なぜ、分かっ

たのですか？我々は漁師です。魚を獲ることが生き甲斐でずっとそのことをやって来ました。我々に獲れなかったのになぜ…？」というような応答ならよく分かりますが、ペテロのことばはそうではありませんでした。「私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」と、ペテロはこの経験によってイエスがだれであるかということを知るのです。このイエス・キリストこそが神であると知るのです。だから、彼は「主よ。」と呼んでいます。「私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」と、この漁と自分の罪深さは全く無関係なように思いますが、ペテロはここにおられるイエスは聖い神であり、その方の前に私は立っていると覚えたときに、「主よ、どうぞ、私を滅ぼさないでほしい。私は罪は深い者ですから…、あなたは聖い神であられるから」としか言えなかったのです。ですから、神を見た人たちに共通していることは、自分の罪深さに気付かされて神の前におののいています。自分の罪深さを知っている者たちは神の前にこのようにへりくだっています。

さて、最初にも話したように、確かに、この人たちはこうして主に対する恐れを現わしました。問題は、私たちがそのような恐れを抱いているかどうかです。

1) 自分の罪深さを知っているか？

・心に潜む罪を知っているか？

あなたは自分の心の中に潜んでいる罪を、汚れをよく知っていますか？パウロでさえ「私は本当にみじめな人間です」と言いました。信仰の勇者であったパウロがそのように言うのです。ローマ7：24「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と。また、パウロは「私は罪人のかしらだ」と言っています。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」(Iテモテ1：15)。彼は神を覚えるときに、その神の目に映る本当の自分の姿を見るのです。確かに、救いには与っていました。しかし、それでいながら、パウロがそこにみた自分は罪に汚れた醜い自分だったのです。もちろん、主は赦してくださった。しかし、赦されていながら、私たちの心はどれ程罪に汚れているか、説明するまでもありません。なぜ、私たちはこれ程までに神が喜ばれないことを平気で行ない続けるのか？パウロのことばを借りるなら、ローマ7：15-19を見てください。「:15 私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。:16 もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。:17 ですから、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。:18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。:19 私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。」と。

クリスチャンの皆さん、あなたはこのように自分を正しく見て、自分の罪深さ、その汚れを嘆いていますか？もう罪はすべて赦されたのだから、そのことについては考えなくてもいいのだ、救われたことを楽しみ喜んで感謝しながら生きていけばいいと。もちろん、私たちはそのことを感謝しながら生きます。しかし、もしそれだけなら、なぜ、パウロはこのように自分自身を見てこのように記しているのでしょうか？彼らは神を恐れていたのです。皆さん、私たちは今日この瞬間、神の前に立っています。神はあなたのすべてを見ておられます。あなたのことばもすべて聞いて来られたし、あなたの行ないもすべて見て来られたし、あなたの心の中にある動機もちゃんと見ておられます。

その神の前に今私たちが立っていることを覚えるときに、私たちは後ずさりしませんか？どうしてこんな私が聖い神の前に立てるのか？と。自分のことを正しく見るときに、確かに、神によって赦されていながら、私の中には神がお喜びにならない思いがあるのです。神が耳を覆いたくなるような、そのようなことを口にしてしまうのです。そのような本当の自分の姿を見たときに、「神様、私は罪に汚れた者です。私は本当にみじめな人間です。」と言わざるを得ません。

まず、私たちが覚えるべきことは、神を恐れる人は自分の罪深さを知っているということです。もちろん、「私は、ほんとうにみじめな人間です。」と言ったパウロはそれで終わっていません。もし、それで終わってしまうなら、私たちはどんどん自己憐憫に陥ってしまいます。「私のような者は神のお役に立たないのだから、生きていても意味がない。私のような者は教会にいてもみな足を引っ張るだけだ」と、そのようになっていきます。感謝なことに、パウロは「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。…」(ローマ7：25)と言います。彼は本当の自分を知って、そのような自分に備えられた神の恵みを見て神に感謝するのです。だから、私たちも当然、神によって救われたことを感謝します。同時に、私たちがしっかり覚えるべきことは、自分はいかに神の前に罪に汚れた者であるかということです。そのことを覚えるならもっと感謝する者になります。自分がいかに汚れた者であるかを分かっているほどに、なぜ、神はこんな私をこれ程までに憐れんでくださったのか？と思います。主を恐れる人はこのように自分を正しく知っている人です。自分の罪深さを正しく知っているのです。

・自分を自慢しない

パウロの別のことばを見ると、彼は「自分の弱さを誇る」と言いました。Ⅱコリント 11 : 30 「もしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります。」と。自分の弱さ、自分の無力さのことです。「弱さ」とは自分が虚弱な状態にあるということです。自分では余りにも弱すぎてできない、そのような者だと言うのです。つまり、パウロは自分の罪深さを知っていただけではないのです。自分がいかに弱い者かを知っているのです。自分は自分の努力をもって救いを得ることはないし、神に喜ばれる生き方も、残念ながら、自分の力ではできない、本当に私はみじめな者です。でも、感謝なことに、こんなどうしようもない、弱い醜い私を神は憐み救ってくださった、だから、彼は自分の弱さを決して忘れることなく、そこから目を背けることなく、それを見ながら「だから神さま、私はあなたの助けが必要なのです。弱い罪深い者だから、あなたに喜ばれる生き方をするためには100%あなたの助けがいます。私が誇るの、私が何をして来たかではなく、私のもっている学位や財産でもなく、こんなに私が弱いということです。」と言うのです。

なぜ、彼はこのように誇ったのか？なぜなら、そのことを覚えていることによって、私たちは私たちに助けてくださる神のところに行くからです。もし、パウロが自分の行なった功績や自分の力や知恵を誇っているならどうでしょう？神のところに行かないで、すべてのことを自分の力でやろうとしませんか？自分の弱さを知っている人は、いつも神のところ助けを求めにいきます。そのような人を神は使って神のみわざを成してくださるのです。だから、パウロは非常に謙虚な人でした。パウロはへりくだらなければいけないと思っていたわけではありません。彼は自分を見て「私は本当にみじめだ」という結論しか引き出せなかったのです。「いったい何をしているのか？同じことを何回繰り返すのか？何度やったら学ぶのか？」と、そういう葛藤の中で、自分を卑下するのではなく、救ってくださった神を見上げて、その方の助けをいただきながら、神に喜ばれることをしていこうとしたのです。

本当に神を恐れている人たち、その人たちは自分のことを正しく知り、それゆえに、神に信頼を置いて生きています。ですから、私たちは自分の罪深さを本当に正しく知っているかどうか、そのことを考えてみなければいけません。

2) 自分の罪と戦い続けているかどうか？

確かに、私たちは自分はいかに罪深い者であるかを知りながら歩いていくことが必要だと見て来ましたが、同時に神は、私たちが罪と戦い続けていくということを教えています。エペソ 6 : 11-12 には「:11 悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。:12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」とあります。私たちは今戦場において戦い続けているのです。神を恐れている者たちは、先に見たように、この戦いであっても自分の力で勝利できないと知っています。みことばが教えるように「神のすべての武具を身に着けなさい。」です。一生懸命自分の心を鍛錬して…と言っているではありません。私たちがこの世にあって、この罪との戦いを戦い続けていく中にあって、私たちには神の助けが必要なのです。「神のすべての武具を身に着けなさい。」と。

だから、神を恐れている人は、今、私たちがこの地上にあって罪との戦いを経験している中で、神の助けを頂き続けていこう、そして、その神の助けによって何とか神に喜ばれる歩みをしていきたいと願います。ソロモンはこのように言っています。箴言 8 : 13 「【主】を恐れることは悪を憎むことである。わたしは高ぶりとおごりと、悪の道と、ねじれたことばを憎む。」。同じ箴言 16 : 6 にも「…【主】を恐れることによって、人は悪を離れる。」とあります。

今日のテキストに戻って、Ⅱコリント 5 : 11 「こういうわけで、私たちは、主を恐れることを知っている、…」とあり、これは当然、前から続いています。前の10節には「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。」とあります。私たちはみなキリストのさばきの座に立ち、そこで信仰者としてやって来たことのすべてを正しく神によってさばかれる、神からの報いをいただくと言います。「こういうわけで、…」とありますから、パウロは当然そのことを覚えてそのような歩みをしていました。主を恐れることを知っている、主を恐れる者にふさわしい生き方がどのような生き方かを私は知っているとパウロは言いました。つまり、パウロは当然、キリストの前に立つということを覚えながら今日を生きていたということが、このみことばによって明らかです。私たちはこの地上にあってしっかりと罪との戦いを戦い続けていくことが必要です。

罪だらけの中、誘惑の中に私たちは生きています。テレビをつけても、ラジオを聞いても、雑誌を見ても、電車に乗っても、ありとあらゆるところに誘惑があります。かつて、アメリカは大変だ、高速道路を走っていると大きなビルボード（屋外の広告板）があって、余り芳しくない広告があると…。日本に来てみると、驚くことに、電車の中には週刊誌の良くない広告があったり、インターネットでは

間違っただけに誘導していきような巧みな罠が仕掛けられています。携帯電話でもいろいろな情報が入って来ます。罪の中を私たちは生きています。私たちを食べ物にするような悪の働きは私たちの周りに溢れています。

パウロは、信仰者である私たちはこの地上にあってこのような罪と戦っていくと言います。そして、そのような戦いを続けている人たちは主を恐れているのです。主の前に立つことを覚えているからです。私が何を選択するのかは、神からどのような報いをいただくのかに掛かっています。

主を恐れるということ、信仰者の皆さん、自分を正しく知ることです。そして、今自分がどのような状況に置かれているのかしっかり覚えることです。今、私たちは戦場にいるのです。この罪との戦いを戦い続けていくのです。主を恐れている者たちはそのことを知った上で、主にお会いする日が必ずやって来て、主の前で自分のすべてがさばかれることを覚えて、そのために今日を正しく生きようとしている者たちです。

2. 畏れる

このことばには間違いなくこのような意味が含まれています。「主を喜ばせるために忠実に歩む」ということです。罪を憎むだけでなく、罪から離れていくことだけでなく、今度は、主に喜ばれることが何であるかを考えて主に対して忠実に生きていこうと、そのような生き方を私たちに教えてくれます。

*主を畏れる生き方とは？

1) 主の命令を信じること

創世記22章にはアブラハムとイサクのことが書かれています。よく皆さんがご存じの出来事、アブラハムがイサクをささげるところです。この話を今説明することはしませんが、よく思い出してください。アブラハムとサラに与えられたイサクを神はささげようとされました。そして、アブラハムはイサクを伴ってモリヤの地へと出かけます。今のエルサレム、金のドームが立っているところです。そこで、ご存じのように、イサクを祭壇の上に載せて、今まさにイサクを殺そうとしたときに、主の使いが天からこのように言います。22：11-12「そのとき、【主】の使いが天から彼を呼び、「アブラハム。アブラハム」と仰せられた。彼は答えた。「はい。ここにあります。：12 御使いは仰せられた。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」。

「あなたが神を恐れることがよくわかった。」とそのよう主の使いはアブラハムに告げました。なぜ、アブラハムはこのように言われたのでしょうか？アブラハムは神の命令に従ったからです。イサクをささげなさいと言われたときに、彼は喜んでそれを行なおうとするのです。そのことはいかに悲しみに満たされていたのか、私たちにはある程度想像がつかます。百歳にして与えられた子どもです。神の約束の子です。今、この子を殺せと…。アブラハムは自分の感情よりも神の言われたことに従おうとしました。なぜ、そのように選択できたのか？見て来たように、アブラハムは神を畏れていたからです。アブラハムはどのようにすれば神を喜ばせることができるのかを考えたのです。そして、彼は主の約束に、主の命令に忠実に生きることこそが神を喜ばせることだと知っていました。だから、彼は妥協しなかったのです。この行動が彼が主を畏れていることを明らかにしたのです。

だから、私たちが主を畏れる、主を心から敬うというのは、主に対して忠実に生きること、主の命令に従うことです。神が与えてくださった約束を信じることです。そのようにしてアブラハムは祝われています。新約の時代になって、みことばが教えることは、たとえ、アブラハムがイサクを殺したとしても、主は約束の成就のために、すなわち、イサクから子孫が増え広がるという約束を成就するために、必ず、イサクをよみがえらせるであろうと、ローマ4：3に「聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義とみなされた」とあります。そのように信じた、それが彼の義と見做されたと。」ある通りです。アブラハムは神の約束を信じ、そして、神の教えに従ったのです。それが神を畏れていることを明らかにしました。

2) 主の教えに従うこと

申命記4：10でモーセは言います。主の命令を伝えています。「あなたがホレブで、あなたの神、【主】の前に立った日に、【主】は私に仰せられた。「民をわたしのもとに集めよ。わたしは彼らにわたしのことばを聞かせよう。それによって彼らが地上に生きている日の間、わたしを恐れることを学び、また彼らとその子どもたちに教えることができるように。」。民を私のところに集めなさい、主はこのように言われたと…。何のために？「わたしのことばを彼らに伝えよ。彼らがわたしのことばを聞くように、私の教えを知るように。彼ら自身がそれを守り、そして、次には自分の子どもたちにそれを守るように教えていくように。」と。ですから、みことばを実践するということは、主を畏れることを学ぶことであると、このように申命記のみことばは教えています。神の命令に従うこと、そして、私たちは神の教えを信じてそれに従っていく、そのことによって、神を畏れていることが神の前に明らかになるのです。

* 問題

このような例を見た私たちひとり一人が考えなければいけないこと、それは「あなた自身が主への畏れにおいて成長しているかどうか」です。主を敬うということにおいて成長しているかどうかです。もう一度、Ⅱコリント5：11に戻ってください。パウロは「私たちは、主を恐れることを知っているのです、」と言って、パウロたちはそのように生きていました。彼は、「人々を説得しようとするのです。」と言います。なぜなら、自分たちと同じようにこのコリントの人たちが歩むことを望んだからです。「私たちのことは、神の御前に明らかです。」と、つまり、神は私たちの動機、心をご存じだからです。「しかし、あなたがたの良心にも明らかになることが、私の望みです。」と、それがあなたがたの前にも明らかにされることを望んでいる。なぜなら、これらのことを通して、コリントの人たちが間違った教えに惑わされて、これまで忠実に生きて来たその生き方が惑わされることがないように、自分たちが歩んでいるのと同じように、彼らもこれからも継続して歩み続けていくようにと、そのことをパウロは望んでいるのです。

パウロがこの11節で言うように、パウロたちが生きて来たその信仰者としての歩みの動機となっていたこと、それは「主を恐れること」です。先ほども見て来たように、だから、彼は罪を憎んだのです。だから、彼は神に喜ばれることをしていきたいと願ったのです。いずれ、私は神の前に立って、神のさばきを受けるのだと、そのことを覚えるだけで身が引き締まる思いがします。同時に、「本当にみじめな人間だ」と告白したパウロ、自分の罪深さをよく知っていたパウロ、そのような私をここまで愛してくださっている主、この方を悲しませたくないという思いから、彼は神が喜んでくださることを為し、神が憎まれることから離れていく、まさに、主への恐れをもって生きていたのです。悪から離れるだけではないのです。神が喜ばれることを為していくのです。そして、神が憎まれることから離れるのです。これが一対です。

そして、このような神を恐れる生き方が私たちに可能なかどうか？実は、そのことまでもパウロは教えてくれています。そのことを見る前に、神を恐れることに関して、誤った悪い例を紹介します。

* 悪い例

1) 祭司たちの罪

祭司たちは確かに主に対する奉仕をしていたのですが、問題がありました。彼らは、

- ・ 神を第一にしていなかった
- ・ 神に従っていなかった

ですから、主はこのように言っています。マラキ1：6「子は父を敬い、しもべはその主人を敬う。もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。——万軍の【主】は、あなたがたに仰せられる——わたしの名をさげすむ祭司たち。あなたがたは言う。『どのようにして、私たちがあなたの名をさげすみましたか』と。「言われたことをやっているではないですか!」というのが彼らの言い分でした。でも、彼らは神によって非難されました。彼らの心が伴っていなかったからです。いつの間にか、彼らは神への恐れを忘れてしまったのです。神が憎まれることから離れ、神が喜ばれることを行なうという、あるべき動機がいつの間にか薄れてしまって、その形だけが残っていたのです。奉仕をしてもそこに神への恐れがないなら、神はお喜びになりません。私たちが何度も見て来ているように、これだけ奉仕をしているから私はどのような信仰者であってもいいのだという言い分は通用しません。神の関心は、何をするかではなく、どのような人であるか、どういう信仰者であるかということにあります。あなたが正しい信仰者であるなら、間違いなく、あなたからは正しい行ないが生まれて来ます。

でも、みことばが教えることは、正しい行ないをしてもその心が神の前に正しくなかった人はたくさんいます。マラキが指摘したこの祭司たちはまさにそうでした。確かに、行ないは神に喜ばれていたかもしれないけれど、彼らの心はそうではありませんでした。

2) モーセの罪

もう一人はモーセです。申命記34：4—7にこのように書かれています。「:4 そして【主】は彼に仰せられた。「わたしが、アブラハム、イサク、ヤコブに、『あなたの子孫に与えよう』と言って誓った地はこれである。わたしはこれをあなたの目に見せたが、あなたはそこへ渡って行くことはできない。:5 こうして、【主】の命令によって、【主】のしもべモーセは、モアブの地のその所で死んだ。:6 主は彼をベテ・ペオルの近くのモアブの地の谷に葬られたが、今日に至るまで、その墓を知った者はいない。:7 モーセが死んだときは百二十歳であったが、彼の目はかすまず、気力も衰えていなかった。」、モーセはネボ山から約束の地イスラエルを見たのです。彼はそこで死にました。もう年老いてからだが衰弱してその地に行くことができなかつたのか？みことばはそのようには教えていません。「モーセが死んだときは百二十歳であったが、彼の目はかすまず、気力も衰えていなかった。」と。彼は十分約束の地に入って行って敵を打ち破ることができたのです。でも、神が彼のいのちを取られたのです。なぜでしょう？モーセの罪です。

申命記 32 : 5 1に「あなたがたがツインの荒野のメリパテ・カデシュの水のほとりで、イスラエル人の中で、わたしに対して不信の罪を犯し、わたしの神聖さをイスラエル人の中に現さなかったからである。」とあります。二つの罪がありました。

・主に対する不忠実の罪

「わたしに対して不信の罪を犯し、」とされています。どのような罪だったのか？これは民数記 20 : 8 - 11 に記されています。「:8 「杖を取れ。あなたとあなたの兄弟アロンは、会衆を集めよ。あなたがたが彼らの目の前で岩に命じれば、岩は水を出す。あなたは、彼らのために岩から水を出し、会衆とその家畜に飲ませよ。」:9 そこでモーセは、主が彼に命じられたとおりに、【主】の前から杖を取った。:10 そしてモーセとアロンは岩の前に集会を召集して、彼らに言った。「逆らう者たちよ。さあ、聞け。この岩から私たちがあなたのために水を出さなければならないのか。:11 モーセは手を上げ、彼の杖で岩を二度打った。すると、たくさんの水がわき出たので、会衆もその家畜も飲んだ。」、モーセは神が命じた命令に従わなかったのです。

・主に対する不敬の罪

二つ目は「主に対する不敬の罪」です。32 : 5 1に「わたしの神聖さをイスラエル人の中に現さなかったからである。」とあります。神ご自身の神聖さをイスラエルの人たちの前に現わさなかったと、つまり、神はご自身が聖い方であるのに、モーセはイスラエルの人々の前でそのように扱わなかったと言われるのです。というのは、人々が水を欲したときに、それは主のみ力を示すすばらしい機会だったのです。なぜなら、岩に命じて水が出て来るなど起こり得ないことです。神はそうしてご自身のみ力を示そうとされたのです。ところが、モーセはそれを無視しました。自分の判断で岩を打ったのです。本来なら、岩に命じたなら岩から水が出て、主のすばらしさ、み力が明らかにされるところだったのです。

モーセの神に逆らったという行為を見たときに、神が命令しておられるのに、それに対してモーセは正しい態度をもって扱わなかったのです。神が言われたことです。当然、私たちは従うべきであるのに、モーセは正しい態度で扱わなかったのです。だから、不敬の罪なのです。神を敬わなかったのです。わたしが神であるのに、わたしが命じたことをあなたはしなかったと。これが原因でモーセは約束の地に入ることができなかったのです。罪が原因でした。私たちが考えなければいけないことは、私たちはこのような神への恐れをもって生きているかどうかということです。

結論 : このような生き方は私たちに可能である

今日のテキストから見ているように、神が喜ばない罪から離れ、神が喜ばれることを行なっていく。神の命令を信じてその約束、教えに従っていくと。そういう生き方が可能かどうかです。パウロたちはやっていました。それが可能かどうか教えているので、今日のテキストに戻って、Ⅱコリント 5 : 14 を見てください。「というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。私たちはこう考えました。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。」とあります。「取り囲んでいる」とは「追い立てる、駆り立てる、促す」ということです。つまり、パウロが教えることは、このような神を恐れる生き方はキリストの愛がそのように私を押し出していくということです。現在形を使っています。そのように神は働き続けると言うのです。これはキリストへの愛ではありません。「キリストの愛」がそのようにするのです。神の愛がそのようにあなたのうちに働くということです。

ということは、まとめるとこう言えます。新しく生まれ変わった私たちクリスチャンは神の愛をいただきました。その愛をいただいた者は、その愛をもって神を愛する者、人を愛する者へと生まれ変わった。神によって生まれ変わった私たちは、この神を信じ信頼する者として歩むのです。そういう人へと生まれ変わったのです。同時に、神によって生まれ変わった者たちは、神を恐れて生きる者へと生まれ変わったのです。神が憎まれることから離れていきましょう、神が喜ばれることを行なっていきましょうと、そういう生き方は私たちににとって可能だと言うのです。なぜなら、あなたに与えられたキリストの愛がそれを可能にしてくれるからです。

ですから、このような生き方はできるのです。パウロたちが神を恐れながら生きたように、私たちもそのように生きることができるのです。英国の牧師であり聖書学者であるキャンベル・モルガンがこのように言っています。「キリストの愛が私たちに注がれて（ローマ 5 : 5 「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」）、強く迫って来る。畏れはこの愛とつながっている。それは、我々が愛を傷つけないようにとの畏れである。」と。今、私たちが見て来たように、神の愛によって生まれ変わった私たちは、神を悲しませたくない、神を傷つけないと、そのような思いを生きる者へと生まれ変わったのです。だから、みことばをしっかりと学び、その教えに従っていくことが必要なのです。

今日、見て来ました。主を恐れるとはどういうことが？神が喜ばれることをやっていくのです。何を喜ばれますか？神のみことばをしっかりと信じて、その教えに従っていくことです。今日、私たちが見て来たこの「神を恐れる」ということ、パウロが私たちに教えて続けてくれるその生き方を見たときに、

全部つながっていませんか？パウロは神が悲しまれることから離れよう、却って、神が喜ばれることをしていこうと、そういう人へと私たちは生まれ変わったと言うのです。

でも、そういう人へと成長するためには、みことばを聞くだけではだめなのです。みことばを信じて、それを守り行なっていくことが必要なのです。そうすることによって、あなたは成長していくと言います。主を恐れる者として成長していくのです。あなたが成長することは大切です。それはあなたが成長することによって、あなたのうちにいる神が明らかにされるからです。

あのメリバにおいてモーセは、神の栄光が現わされるという大切な機会を不信の罪をもって、不敬の罪によって逃してしまいました。あなたの人生を神は用いて栄光を現わすという神の約束に対して、もしあなたがそれを信じないなら、そして、神を敬っていないなら、つまり、神を恐れていなければ、そのようなことは起こらないのです。神を恐れる者として生まれ変わった私たちはこのような歩みにおいて成長することです。それを神は可能にしてください。しっかり主のみことばに立ちましょ、皆さん。主の教えてくださったことにしっかり信仰をおいて、それに従っていきましょう。そして、何が神の前に喜ばれないことで、何が喜ばれることなのか？神の助けをいただきながら、しっかり判断し、そのように歩いていくことです。そのときに、私たちを生まれ変わらせてくださった神のすばらしさが明らかにされていくのです。そのようにして、旧約の人たちも新約の先輩たちも生きて来たのです。

問題は、あなたがそのように生きるかどうかです。今日からそのように生きることです。

《考えましょ》

1. 「主を恐れる」とはどういう意味ですか？また、それがどうして大切なのでしょうか？
2. 「主への恐れ」において成長するにはどうすればよいのでしょうか？
3. 「主を恐れる人」はどのように生きるのか？その特徴を記してください。
また、「主を恐れぬ人」の特徴を記してください。
4. モーセが約束の地に入れなかった理由を説明してください。